

岐阜県
恵那市

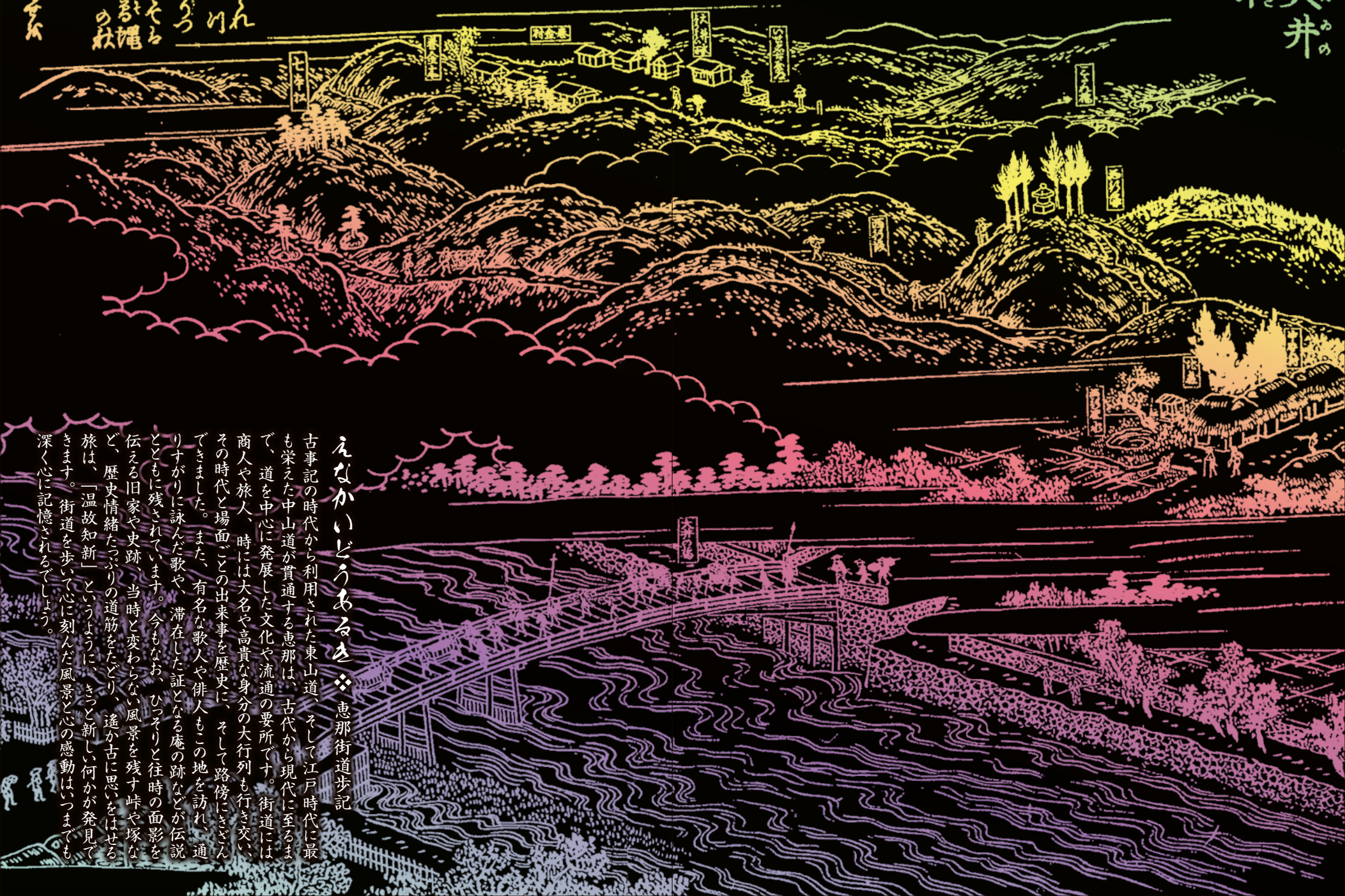
恵那街道歩記

えなかいどうあるを

中山道・西行伝説編

時間を超えて古代から現代へとつながる道。
道が記憶する、いにしへの歴史情緒をたどり、心にきざむ。





えなかいどうあるを ◆ 恵那街道歩記

古事記の時代から利用された東山道、そして江戸時代に最も栄えた中山道が貫通する恵那は、古代から現代に至るまで、道を中心に発展した文化や流通の要所です。街道には商人や旅人、時には大名や高貴な身分の行列も行き交い、その時代と場面ごとの出来事を歴史に、そして路傍にきざんできました。また、有名な歌人や俳人もこの地を訪れ、通りすがりに詠んだ歌や、滞在した証となる庵の跡などが伝説とともに残されています。今もなお、ひっそりと往時の面影を伝える旧家や史跡、当時と変わらない風景を残す峠や塚など、歴史情緒たっぷりの道筋をたどり、遙か古に思いをはせる旅は、「温故知新」というように、きっと新しい何かが発見できます。街道を歩いて心に刻んだ風景と心の感動は、いつまでも深く心に記憶されるでしょう。

恵那街道歩記

えなかいどうあるま

中山道・西行伝説編

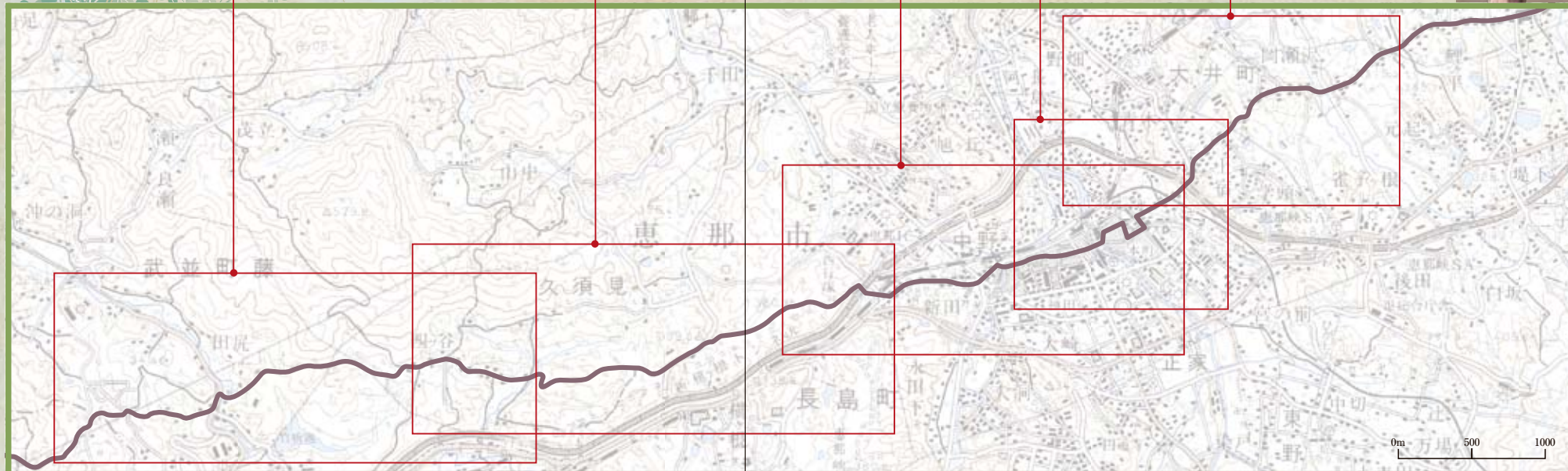


恵那 中山道 散歩マップ

- ◆ 岡瀬沢から大井宿 05
 - ◆ 大井宿 07
 - ◆ 大井宿から西行塚 09
 - ◆ 西行塚から四ッ谷 11
 - ◆ 四ッ谷から藤 13
- ### 恵那の西行
- ◆ 恵那の西行 15
 - ◆ 恵那にかかわる西行の歌 16
 - ◆ 恵那の西行と史跡 17



時間を超えて古代から現代へとつながる道。
道が記憶する、いにしへの歴史情緒をたどり、心にきざむ。



本書に掲載したこの地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1地形図、5万分1地形図を複製したものである。
(承認番号 平■■■部復、第■■■号)

岡瀬沢から大井宿
区間距離●約二・三 km

大井宿
区間距離●約〇七 km

大井宿から西行塚
区間距離●約二・二 km

西行塚から四ッ谷
区間距離●約二・一 km

四ッ谷から藤
区間距離●約三・〇 km

恵那の西行

中山道

関ヶ原の合戦に勝利をおさめた徳川家康は、江戸に幕府を開き、主要な街道の整備に取りかかりました。関ヶ原の合戦の翌年、慶長六（一六〇二）年には東海道の整備を開始し、慶長七年に中山道の整備を開始しました。中山道は、江戸日本橋を起点として武蔵（東京都・埼玉県）、上野（群馬県）、信濃（長野県）、美濃（岐阜県）、近江（滋賀県）を経て京都三条大橋に達します。ただし、近江草津宿で東海道と合流します。ですから、中山道というのは江戸日本橋から近江守山宿までの間、百二十八里十三町三間（約五百四四km）の街道をいいます。この間に板橋宿から守山宿まで六十七の宿場があり、一里ごとに一里塚が設けられていました。

中山道は、東海道と並ぶ江戸時代の主要街道で奥州道中、甲州道中、日光道中と合わせて五街道と呼ばれ、道中奉行の管轄下にありました。これらの主要街道から脇街道と呼ばれる街道が枝分かれして江戸時代の交通網を形作っていたのです。

私たちのまちは、中山道が江戸時代の初め頃に建設、整備されて以来、その道とともに発展してきました。その名残のひとつである大井宿は、中山道六十九次のうち、江戸から数えて四十六番目の宿場町で、江戸時代後半には、美濃国にある中山道の十六の宿場の中でもっとも繁栄し、そこかしこに往時の面影が残っています。中山道は、恵那市内をほぼ十一・四kmにわたって横断していますが、特に長島町中野から武並町藤までの間は、江戸時代そのままの姿が残されているといってもいいくらいです。それでは恵那市の中山道を東（江戸側）から解説していきましょう。

岡瀬沢から大井宿

岡瀬沢は、恵那市の中山道の東の入口。起伏のある坂道と近世の街道の特徴でもある緩やかなカーブが続きます。沿道には、庚申、馬頭観音、道標など江戸時代の昔を想わせる石造物などが残っています。また、街道に沿って並ぶ民家も、どことなく江戸時代の風情を残しています。



岡瀬沢から大井宿への途中に甚平坂というところがありますが、ここには根津甚平という鎌倉時代の武将の伝説と甚平の墓という宝篋印塔（岐阜県指定文化財）があります。甚平坂は、歌川広重の浮世絵版画『木曾海道六拾九次之内 大井』のモデルともなった場所といわれ、公園として整備されています。甚平坂をすぎると明治まで一里塚のあった関戸、坂を下って石仏の並ぶ上宿を通って大井宿に入ります。

①根津神社

源頼朝の家臣根津甚平をまつる神社です。岐阜県の文化財に指定されている高さ二・四mの宝篋印塔があり、甚平の墓標といわれています。

伝説によれば根津甚平は、信州結城が原で旅人を苦しめている怪鳥八重羽の雉退治を命じられて、この地にやってきたのですが、ここで力尽き、供をしていた馬、犬も倒れてしまいました。雉は日吉（瑞浪市）まで逃れ、そこで死んだといいます。

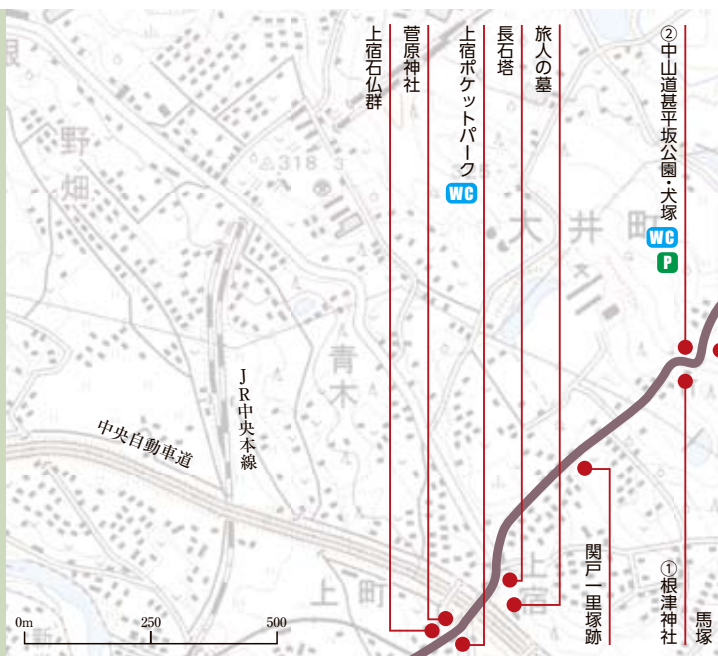
伝説はともかく、この宝篋印塔は、県内でも有数の大きさで、鎌倉時代に建造されたものといわれています。



●木曾海道六拾九次之内 大井 (中山道広重美術館蔵)

音もなく降り積もる雪の中を黙々と歩む馬上の旅人。背後に恵那山、木曾の山々が静かに連なる甚平坂からの景色であるとされています。

松、人物、印章に用いたわずかな色が効果的に画面を引き締めており、「東海道五拾三次之内」(保永堂版)の「蒲原」と並ぶ雪景色の名画です。



②中山道甚平坂公園

平成四年二月に完成した小公園で、この場所は歌川広重の浮世絵版画『木曾海道六拾九次之内 大井』のモデルになった所ではないかと考えられています。ここから北側、東側を見ると御嶽山、恵那山を望むことができ、その山谷から広重の雪景色の名作を思い起こすことができます。



大井宿

右手に馬頭観音を見ながら上宿の五妙坂を下り、木造の上横橋を渡ると大井宿に入ります。大井宿は、街道が直角に曲がるいわゆる升形（ますがた）が六カ所あり、大きな特徴となっています。中山道ではこれだけの升形のある宿場は、大井宿以外には知られていません。

上横橋を渡り、第一の升形を曲がると、すぐに大井宿本陣跡の正門が見えます。残念ながら本陣の建物は、終戦直後に焼失してしまいましたが、安土桃山様式を残しているという正門は、幸い焼失を逃れ、秀麗な姿を今に残しています。

本陣の前で第二の升形を曲がると本町にです。ここから市神社前の第四の升形までには幕末から明治初期の町家がいくつか残り、宿場らしい風情となっています。資料館として整備されている大井村の旧庄屋（古山家）、旧旅籠、明治天皇行在所等をすぎ、江戸時

④中山道ひし屋資料館

大井宿の有力な商家であった「ひし屋」古山家は、江戸時代中期以降、大井村の庄屋を務めた家柄で、明治以降は郵便取扱役・恵那郡役所掛屋に任命され、養蚕研究や俳諧文化の推進にも力を尽くしました。その住居は明治初年に改築されていますが、大規模で質の良い近世的町家建築の特色をよく示しており、恵那市の文化財に指定されています。

中山道ひし屋資料館はこの古山家住宅を修復・復元し、大井宿の町家を体験してもらう施設で、店蔵を改修した展示室では、中山道・大井宿、ひし屋の三つのコーナーに分け、絵図や古文書、調度品なども展示しています。

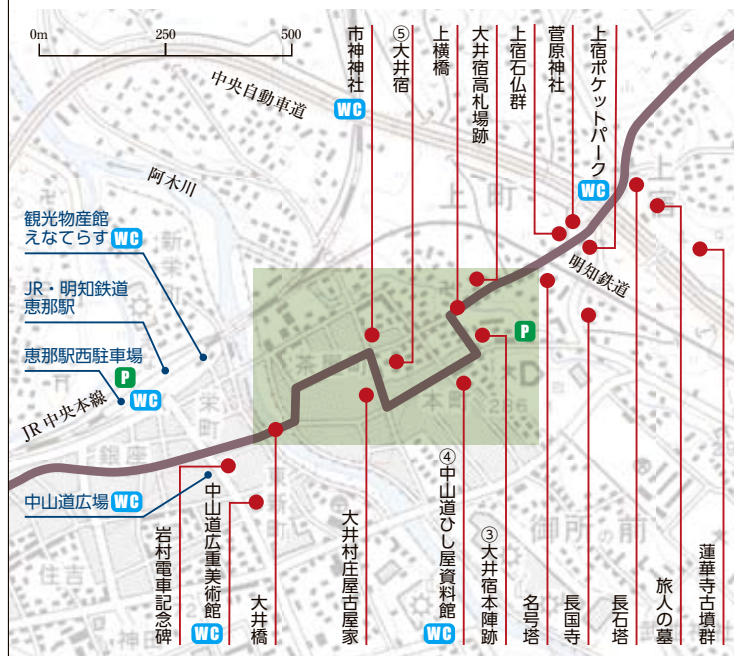
- 入館料 大人1100円、18歳以下無料
- 開館時間 午前9時～午後5時
- 休館日 月曜日（月曜が祝日の場合はその翌日、祝日の翌日、年末年始）
- 問い合わせ 0573-203266



●皇女和宮の降嫁と大井宿

仁孝天皇の第八皇女の和宮が將軍家茂の正室として嫁ぐ行列は、総勢4千人～5千人と推測され、文久元年（1861）10月27日から11月1日の4日間続きました。和宮の輿は29日の運行で、深立場で休憩、子持松で野立の後、大井宿で昼食の予定でした。

旧本陣家には、女官から拝領したという匂い袋と紙入れが今も残っています（上の写真）。



代から続く旅籠の所（第二の升形）を曲がると左手に旧庄屋（古山家）、正面に市神社が見えてきます。神社前（第四の升形）を曲がり、かつてはたくさんの茶屋が建ち並んだ茶屋町筋をさらに二つの升形を曲がって通り抜け、大井橋に出たところで大井宿は終わります。

③大井宿本陣跡

本陣は、大名、公家、幕府の役人など身分の高い人たちが宿泊する場所でした。各宿場には必ず本陣、脇本陣が備えられていました。大井宿の本陣は、書院のついた豪壮な本陣でしたが、昭和二十二年に焼失してしまいました。幸いなことに本陣正門と庭園が残り、今もその姿を伝えています。岐阜県の文化財（史跡）に指定されています。



⑤大井宿の町並みと町家

大井宿は、中山道四十六番目の宿場。全長は六町半（約七百m）で、美濃十六宿で、もっとも繁栄した宿場といわれ、天保十四（一八三三）年には大小あわせて四十一軒の旅籠があったといえます。現在では、当時の面影を残す町家も少なくなっていますが、当時の大井宿を特徴づけた六カ所の升形は今も健在で、道幅もほぼ往時のままです。

大井宿から西行塚

阿木川にかかる大井橋は、江戸時代には高欄付の木造橋であったといわれています。それ以前には、阿木川の中ほどに石垣でつくった中島を設け、そこに橋を架けていたといわれています。現在は、鉄筋コンクリートの頑丈な橋ですが、木造時代には何度も流されたということです。

大井橋から西は、現在は商店街となつていますが、江戸時代は、ほとんど人家がなく、一面の水田であったといえます。大井橋から西へ約五百m、旧中野村庄屋のあった本酒屋という、がらしりした旧家があります。今も当時の庭園などが残されています。

この家のすぐ近くに江戸時代から灯明の消えたことがないという中野観音堂を左に見て、長島橋を越えて坂を下り、交差点を西に向かうと、やがて左手に西行硯水公園が見えてきます。ここには硯水という池があり、かつて歌人西行がこの水で墨をすつたという伝説があ



⑦ 中山道広重美術館

歌川広重の浮世絵版画を中心とする美術作品の展示・収集・保管を主な目的に、平成十三年九月に開館しました。収蔵する美術品は広重がその円熟期に中山道を描いた「木曾海道六拾九次之内」など約千四百点。美術館では、二つの展示室を活用し、収蔵美術品を企画展という形で毎月展示替えしています。また、館内には浮世絵について楽しく学べる浮世絵ナビールームや情報ギャラリー、美術館、講座室、ミュージアムショップなどもあり、ここで得られる情報や知識を活用しながら、様々な文化活動が展開できる空間となっています。

- 観覧料 企画展五〇円、特別展八〇円
十八歳以下、障がい者本人は無料
- 開館時間 午前九時半～午後五時
- 休館日 月曜日・月曜日の場合はその翌日、祝日の翌日、年末年始
- 問い合わせ 0573・20・0522



▲洗馬

英泉は天保6(1835)年に「日本橋雪之囀」を描き、次々と出版しましたが、途中から広重に交代、ほぼ同じ時期に版元も錦樹堂に代わり、英泉が24図、広重が47図描き、ほぼ4年の歳月をかけて完成しました。

「木曾海道六拾九次之内」71図は、中山道の機能を人々に知らせる目的で出版したものではありません。しかし、英泉や広重の鋭い目と軽妙な筆致は、街道や宿場の風景の中に当時の風俗習慣とともに、中山道の機能までも詳しくとらえています。



▲中津川(雨)

●「木曾海道六拾九次之内」

このシリーズは、絵師や版元が途中で変わるなど、複雑な経緯をたっています。

当初の版元であった保永堂は、天保4(1833)年、歌川広重を絵師として「東海道五拾三次之内」を出版し、大変な好評を博しました。保永堂は続いて「木曾街道」の出版を計画、絵師は当初、広重の予定でしたが、都合により深斎英泉に代わったとされています。



ります。

硯水公園をすぎ、中央本線の踏切を越えると、いよいよ山道になってきます。西行坂の急坂を登ると右手に岐阜県史跡の五輪塔、伝西行塚があります。当地の伝説によれば、西行がこの地で亡くなり、ここに葬られたといわれています。

⑥ 大井橋

現在は木曾海道六拾九次浮世絵版画の陶板が欄干にはめ込まれた鉄筋コンクリートの橋になっています。江戸時代には木造の橋で、長さが三十二間(約四十一m)、幅が二間(約三六m)あり、天明年間以前には、阿木川の中ほどに切石で島をつくり、そこに両岸から橋を架けていたということです。それで中島橋ともいわれていました。



⑧ 本酒屋

本酒屋は中野村の庄屋を務めていました。文久元(一八六〇)年皇女和宮が將軍家茂に嫁ぐとき、中山道を通りしましたが、その受け入れや準備のために岩村藩の代官は、野井村(現二郷町)に過重な負担を要求しました。野井村では、やむなくこの要求を受け入れましたが、先例になつては困ると考えた野井村の本百姓熊崎新三郎は、和宮通過後、本酒屋にいた代官に断りかきました。代官は事なきを得ましたが、後に岩村藩でこの事件での裁判があり、野井村の要求が認められ、代官は罷免されました。

⑨ 中野観音堂

約五・四m×三・六mの入母屋造りで、回廊がついています。阿弥陀如来を本尊とし、江戸時代から灯明が消えたことがないといわれています。観音堂の隣には、寛政八(一七九六)年の秋葉灯籠が建ち、北隣には中野村岡礼場がありました。



西行塚から四ッ谷

西行塚から西に進むと一面に開けた尾根に出ます。ここには槇ヶ根一里塚が旧態をよく残しています。さらに尾根道を西に進むと、やがて槇ヶ根立場(休憩所)に出ます。

槇ヶ根追分は、中山道と下街道との分岐点で立場(休憩所)となっており、茶屋が数軒あつて大いに賑わっていたといわれています。ここから西へ六百mほどは、木立の中を進む尾根道で、追分から三百mほど行つた右手の小高い丘に和宮御通行の際に漆塗りの御殿が建てられたという姫御殿跡、左手に首なし地蔵があります。さらに進んで竹折村の役人が、長ばかまの礼装で土下座をして、街道を通る役人を迎えたという下座切場跡を通り、大名行列が乱れたほどの急坂という、みだれ坂とみだれ橋を渡ると四ッ谷の集落に入ります。

⑪ 槇ヶ根追分

中山道から分かれて竹折、釜戸、土岐、多治見を経て名古屋へ向かう下街道の分岐点で、かつてはここに、京や大阪で全国的ネットを持つ飛脚屋が、寛延一(一七四九)年二月に建てた二基の灯籠がありました。その後移動し、今は明治八(一八七五)年に建てられた駒形の大型道標が立っています(二基の灯籠は、現在国道一九号沿いのダンボール会社入口にあります)。

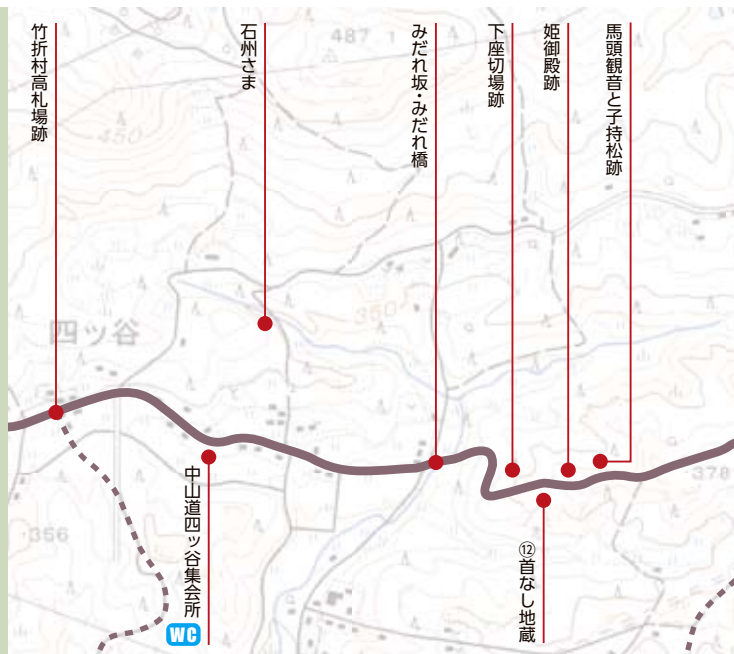
付近は立場(休憩所)となっており、茶屋がたくさんありました。また、下街道は伊勢参りや善光寺参りにもよく利用され、追分には伊勢神宮の御拝所もありました。



● 槇ヶ根追分・茶屋跡の出土品

昭和62年から中山道を文化庁の歴史の道保存整備事業で整備することとなり、槇ヶ根追分と茶屋跡の発掘調査が行われました。

この調査で、かまど、炊事場、便所などの茶屋の遺構や、御所の礎石、下街道の石垣などが確認され、湯飲み茶碗や徳利、急須、灯明皿、硯や古銭など、江戸時代の茶屋の様子を思い起こさせる品々がたくさん見つかっています。



⑫ 首なし地蔵

中山道沿いに立っている首のないお地蔵さんです。この地蔵については次のような昔話があります。ある時、二人連れの武家のめし使いが中山道を旅しており、この地蔵さんの立つてゐる所で昼寝をしていました。ひとりが昼寝からさめてみると仲間の首がありません。怒っためし使いは、お地蔵さんに「仲間が襲われているのに黙って見ていたとは何事だ!」とお地蔵さんの首を刀で切り落としてしまいました。以来、このお地蔵さんは、首のない地蔵といつて首なし地蔵と呼ばれるようになったそうです。



⑩ 槇ヶ根一里塚

街道の両側に一対になつて一里(約三・九km)ごとに築かれた、いわゆる里程標で、三十六町を一里としています。一般的には江戸幕府が五街道の整備を始めた慶長九年頃に築かれました。現存する一里塚は数が少なく、この槇ヶ根一里塚のようにほぼ完全な姿で残されているのは全国的にもまれで、岐阜県の史跡に指定されています。

北塚は、高さ約三・五m、径九・九m、南塚は、高さ三・九m、径十一・九mあります。また、北塚と南塚は、約十mほど斜めにずれています。



四ッ谷から藤

休憩所で一服し、再び舗装された中山道を進み、未舗装の山道へ。小さな橋を渡り、緩やかな坂を上るとのどかな田園風景が広がります。やがて紅坂一里塚に着きます。この一里塚も旧態をよく残しています。横ヶ根一里塚からここまで一里（約四〇）来たわけです。

ここから木立の中を進み、紅坂を下る途中で珍しい形のぼたん岩を足元に見てさらに坂を下り、藤川を越えれば武井町藤の深萱立場。ここまで来れば瑞浪市境まであと一息です。

再び木立の中に入り、侍や町人が歩いてきそうな道を上り、三城峠を越えて下りきつたところが瑞浪市との境です。ここで恵那の中山道は終わり、この先は大湫宿まで約四kmの山道が続きます。

みだれ坂・みだれ橋

石州さま

竹折村高札場跡

妻神

平大茶屋跡

ぼたん岩

⑬ 紅坂一里塚

紅坂

中山道四ッ谷集会所

WC

0m 250 500

中央自動車道

四ッ谷から藤
区間距離 ●約三・〇km



⑬ 紅坂一里塚

紅坂一里塚は、江戸から数えて八十九番目の一里塚です。横ヶ根一里塚からちょうど一里歩いたこととなります。現在でも格好の立ち止まるの場になっていて、歩いた距離がよく分かります。

この一里塚も北塚、南塚が残されており、岐阜県の史跡に指定されています。北塚は高さが約二・二m、径が約九・七m、南塚は、高さが約二・二m、径が約一・三mあります。また、近くの紅坂には、ぼたんの花が開いたような珍しい岩が露出しています。

⑭ 藤村高札場

高札場とは江戸時代、幕府の政令を村々に伝える高札を掲げた場所、村の往来に建てられました。藤村の高札場には、「放火犯の取り締まり」、「キリスト教の禁止」の二枚が掲示されていました。

この高札場は、復元されたもので、横には庚申塔の文字碑が建っています。



● 田尻神明宮の句歌碑群

田尻神明宮の入口には、松尾芭蕉や藤村歴代の俳諧指導者らの句歌碑が15基建てられています。明治44年に境内およびその周辺の句歌碑を集めたものですが、市内で1つの場所にこれだけ多く建てられているところは他にはありません。

藤村には古くから俳諧や和歌の結社がありました。句歌碑群は、その歴史と、当時の藤村の俳諧熱の高さ、文化の姿を物語っているといえるでしょう。

ばばが茶屋跡

ちんちん石

深萱休憩所

WC

佐倉宗五郎大明神

芭蕉等句歌碑群

三社灯籠

⑭ 藤村高札場

深萱立場

⑮ 三城峠

中山道の碑

⑮ 三城峠

この峠の頂上に立つと権現山、奥の権現、そして藤にあった三つの城が見えたといえます。それでこそ三城峠というようになったとわれています。

ここには、ばばが茶屋があったといわれ、その跡が遺構に残っています。



恵那の西行



梅露庵歌碑

平安時代の名高い歌人西行（一一一八—一九〇）は、法名を円位という僧侶でもありました。俗名を佐藤義清（さとうのりきよ）といって鳥羽院に仕える北面の武士でした。

西行は、鎮守府将軍藤原秀郷から九代目の子孫で文武両道に秀で、妻子にも恵まれていました。しかし、突然出家して西行となり、諸国を行脚します。その足跡は、遠く奥州・平泉にまで及んでいます。一方で時の権力者とのつながりも深かったようで、平清盛や藤原秀衡と親交があり、源頼朝にも面会できるほどでした。

歌人としての西行は、『新古今和歌集』に九十四首入るという当代随一の歌人でした。西行は、生涯に三千首以上の歌を詠んだといわれていますが、恋の歌や桜の歌が多く、時の権力者とのつながりとも合わせて考えると、世俗を捨てて出家した僧というイメージとは相容れないところも見られます。

西行は著名な歌人で、しかも諸国を行脚したということから、全国各地に伝説が多くあります。ここ恵那の地でも西行の伝説は、古くから知られています。恵那では大井町長国寺の『長国寺縁起』、東野鈴木家の『阿弥陀如来縁起』に西行の事跡が述べられています。そして東野の竹林庵、長島町永田の梅露庵、三郷町野井の松林庵、西行硯水、杉山の清水、西行塚などが西行の伝承地として伝えられています。

恵那にかかわる西行の歌

一回目の奥州行脚を終えた西行は、帰路を日本海側にとり、信濃を経て美濃に入ったといわれています。『西行物語』『西行物語絵巻』でも西行が信濃から美濃に入ったとされています。西行が詠んだ歌の内容からすると信濃から美濃との国境である神坂峠付近に來たことは確かなのでしょうが、そこから先のことはよくわかりません。

西行の歌のいくつかには、恵那にかかわるものがあるといわれています。そのいくつかを紹介しましょう。

- 思へたゞ花の散りなん木のもとに何をかげにて我身すみなん——山家集
- 待たれつる入相の鐘のおとす也明日もやあらば聞かんとすらん——山家集：西行塚歌碑
- 郭公都へゆかばことつてんこえくらしたる山の哀を——西行上人集
- 道の辺に清水流る、柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ——新古今和歌集：硯水公園歌碑
- 心ある人に見せ場や大井なる花無山の春の気色を——長国寺縁起
- 花無の峯に栖みける鶯は己れと鳴きて春を知るらん——長国寺縁起：花無山歌碑
- 夜登の塚は此に有明の月吉日吉影をならぶる——長国寺縁起
- よもすがらあらしの音に夢さめて大井の夜戸に霰をぞきく——口碑
- 駒形と山にみ雪の残らばや旅も永田の冬の名ごりに——口碑：梅露庵歌碑
- 一つ田の水もわかるる西東月日の夢（影）をうつすあげがた——口碑



西行塚歌碑

【山家集】
日本古典文学大系一九山家集 金槐和歌集
——昭和二十六年（岩波書店）
【西行上人集】
久保田淳編『西行全集』
——昭和五十七年
【新古今和歌集】
日本古典文学大系一八新古今和歌集
——昭和二十六年（岩波書店）

恵那の西行と史跡

長国寺縁起

長国寺は大井町にある曹洞宗の寺。同寺に伝わる『長国寺縁起』は、永禄二（一五五九）年に書かれ、慶長十九（一六二四）年に書されたものです。

東野鈴木家に伝わる縁起で、文四（一七九三）年頃に書かれました。

この縁起によると……
鎌倉から京にのぼらんとした西行は、信濃から美濃に入り、大井の妊娠音に詣でたあと、中野坂にさしかかると花無山の南に「弥陀観音・勢至」の三尊が光を放っていたので、そこに赴くと小堂があり、行基作の三尊があった。そこで西行はこの地に庵を結んだ。ある時、死期を悟った西行は、村人を招き寄せ、自分が死んだら中野坂に埋めるように頼んだ。はたしてその夜半、西行は亡くなり、村人たちは遺言どおりに中野坂の傍らに西行を葬り、そこに五輪塔を建てた。以来、ここを西行根（さいがね）という。

この縁起のあらましは……
西行は、奥州行脚の帰途、中野村で休息した。秋の半ばであるのに東の山一面に花が咲いているように見えたので、東野に入つて花を見ようと山に登つたところ花は咲いていなかった（以来、ここを花無山と言うようになった）。不思議に思つた西行はここに宿をとつたところ、みたがねより光明がさし、山々は、花のごとくに輝いて見えた。西行は、仏の化身がおられると思い、山へ登つて何度も拝んだところ、阿弥陀仏は別な姿で現れ、この地に堂を建て、衆生を済度せよと西行に告げられて西の空へ去つた。感激した西行はそこに阿弥陀仏の尊像を作り、お堂を建てたという。

阿弥陀如来縁起

①伝西行塚
長島町中野の中山道を見下ろす小高い丘にあります。ここからは、恵那市の市街地が一望できます。塚には高さ一四mの五輪塔が建っていますが、西行の墓標と伝えられています。形式的には室町時代初期の五輪塔とされ、岐阜県の史跡に指定されています。



②西行硯水
長島町中野新田の中山道の傍らにあります。西行がこの池の水で墨をすつたとの伝承があり、そこから硯水と呼ばれるようになったといふことです。



③松林庵
二郷町野井の野井川を見下ろす段丘上にあります。恵那市の史跡に指定されています。

④竹林庵
東野向島の阿木川を見下ろす山地の中腹にあります。江戸時代の「木曾路名所図会」にはこの庵についての記述があります。それによると西行は、ここに三年間住んだといふことです。恵那市の史跡に指定されています。

⑤梅露庵
長島町永田の主要地方道多治見・恵那線西側の山麓にあり、公園として整備されています。恵那市の史跡に指定されています。

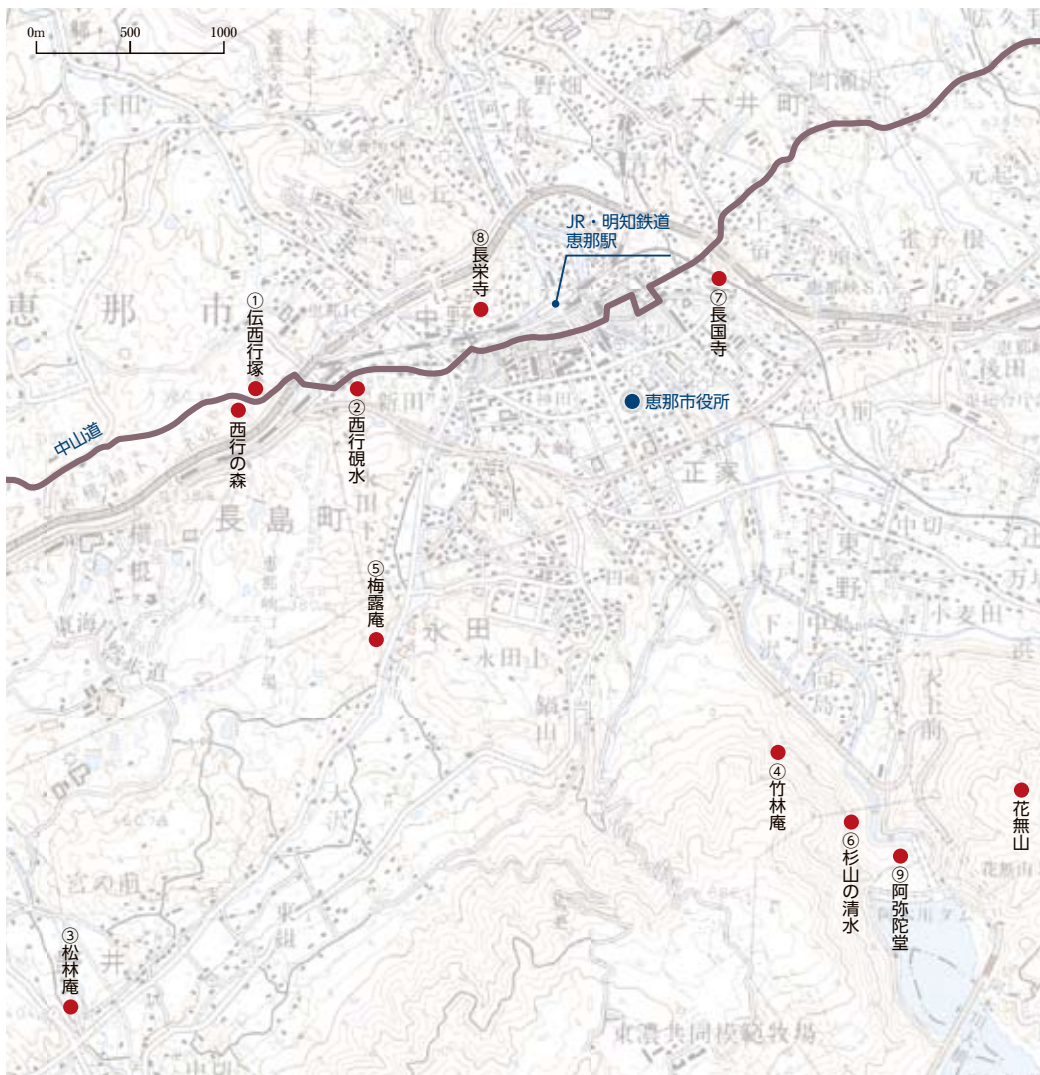
⑥杉山の清水
阿木川ダムの堰堤がすぐ近くに見える旧国道三五号沿いにあります。西行はこの清水を飲み、「甘露がな」といったのが伝わっています。



⑦長国寺 ⑧長栄寺
両寺に西行のものという位牌が残されています。（写真は長国寺の山門）



⑨阿弥陀堂
西行をかたどつたという石の阿弥陀像が安置されています。





● 交通案内

- 大井宿へは
JR中央本線恵那駅下車 徒歩10分
中央自動車道恵那 I.Cより車で5分
- 西行塚へは
JR中央本線恵那駅下車 徒歩25分
中央自動車道恵那 I.Cより車で3分
- 深萱立場へは
JR中央本線並駅下車 徒歩25分
国道19号竹折交差点より車で3分



❖ ガイドボランティア……中山道かたりべの会 ❖

恵那市内の中山道を端から端まで、あるいはゆっくりと大井宿などをご案内します。素人ガイドで流暢ではありませんが、地元ならではの名所紹介や昔話なども織り交ぜてご案内します。申し込み・問い合わせは恵那市観光交流課 (TEL.0573-26-2111) へ。

発行／恵那市教育委員会
岐阜県恵那市長島町正家一丁目 1 番地 1
発行年月日／平成 30 年 8 月 (第 4 版)